

和紙作り 原料は地元産

四国中央・切山地区で手すき体験



大西さん(右)に手ほどきを受け、和紙をすく参加者

高級素材「ガンピ」住民らが採集

オリジナル和紙で地域を盛り上げたい。四国中央市山間部の切山地区で採れた原料のみを使った紙すき体験イベントが、地区内の国重要文化財「真鍋家住宅」であった。同市の和紙職人大西満王さん(24)が「オール四国中央産」の手すき和紙の実現を目指す中、高級和紙の原料で、今ではほぼ流通していない良質な「ガンピ」を地区内の山を巡って集めるなど住民も協力。「切山和紙」の誕生をともに喜んだ。

地域おこし活動に取り組む住民グループ「切山みらい」が企画。市の伝統工芸水引のワークショップを手がける伊予水引金封協同組



「美結会」の講師に水引の結び方を教わる参加者

合の女性グループ「美結会」のメンバーも協力した。ガンピは現在、主に文化財の修復に使われている。一般的な紙の原料だったミツマタより繊維がきめ細かく、光沢が生まれるのが特長。大西さんによると、質の良い国産ガンピは1キ(当たり)5千〜1万円で購入されるが、栽培が難しいこともあり良質な国産は市場にほとんど出回っていない。

「いつかガンピで高級和紙をすきたい」との大西さんの願いに応えたのが「切山みらい」。住民によると、ガンピは同地区の山に自生しているものの、ガンピを使う伝統が途切れたことで見極められる人が少なくなったという。

メンバーらは4月から山に通い、半紙約4千枚分に相当する約8キを採集。11月上旬には、のりの役目を果たすトロロアオイも地区で収穫した。

イベントは11月12日にあり、県内外の6人が大西さんに教わりながら紙すきを体験。紙をいろいろのそばで乾燥させる間、地区の花の梅の水引細工作りにも挑戦し、和紙と組み合わせる御朱印帳のラベルとポチ袋を仕上げた。川之江高校3年森実愛花さん(18)は「普段使っている紙と手触りや風合いが全く違う」と満足そうだった。

イベントを見守った住民は「地区の素材で作った紙が見られるなんて」「地区の文化財を活用してもらえると一番うれしい」と感慨深げ。自治会長の参鍋修一さん(73)は「偶然の重なりと皆さんの協力のおかげで地域おこしに向けて一歩進んだ」と話し、今後は難度の高いガンピ栽培にも挑む考えを示した。



切山地区の素材で作った和紙